

Hyland™

ホワイトペーパー | PASCAL BORNET と KIERAN GILMURRAY

インテリジェント 企業の未来を担う、 AIを活用した インテリジェントな ドキュメント処理 (IDP)



はじめに

組織の多くが手作業によるドキュメント処理に莫大な費用を費やしていますが、このような処理は手間と時間がかかるうえ、エラーが発生しやすくなります。
SAPによると、請求書だけでも年間5,500億ものドキュメントが処理され、請求書に似たその他のドキュメントはさらにその5~15倍の量になると推定されます。

AIを活用したIDPデジタル技術の進歩により、組織はこのプロセスを大幅に効率化し、従業員がエラー修正に費やす時間を削減し、膨大な量のドキュメントに含まれるデータから新たな価値あるインサイトを引き出すことができます。

IDPは、組織によるドキュメント処理方法を変革する最先端のAI搭載デジタルソリューションです。これは、高度なビジネス重視のAIモデルを使用してドキュメント内のテキストと構造を理解するため、従来の光学式文字認識（OCR）やロボティック・プロセス・オートメーション（RPA）の技術をしのぐソリューションとなります。機械学習により、IDPシステムはデータの解釈と分類を「学習」し、ドキュメント処理の精度と速度を大幅に向上させます。

この進歩により、コストとエラーが削減されるだけでなく、人的資源をより戦略的なタスクに集中させ、最終的にビジネスの成長とイノベーションが促進されます。IDPを導入することで、組織は業務を合理化し、効率を高め、従業員と顧客の満足度を向上させることができます。



IDPがもたらす、 より良い成果をより多 く生み出す機会

組織のデータの大半は、マニュアル、画像PDF、ファックスなどの半構造化または非構造化形式です。[Forbes](#)は、すべてのビジネスデータの80%がドキュメント、電子メール、画像、PDFなどの非構造化形式で保存されていると示唆しています。

ドキュメントにはさまざまなフォーマットやレイアウトがあります。タイプ入力されたテキストが含まれるものもあれば、手書きのメモが含まれるものもあり、チェックボックス、表、署名が含まれるものもあります。どの種類のドキュメントにも、独自の課題があります。

請求書を例にとってみましょう。請求書には通常、サプライヤーの名前、支払期限、請求日、請求書番号、発注書番号が含まれます。しかしサプライヤーによって、これらの情報が記載される場所や使用されるラベルが異なったり、あるいはまったくラベルを使用しないサプライヤーもあったりなど、請求書の記入方法はさまざまです。

このような違いがあっても、経理部門の買掛担当者はそこから関連情報を識別し、それをコンピューターシステムに入力することができます。しかし、これは時間と手間がかかるうえ、エラーが発生しやすい作業です。従来のOCRソフトは、テキストや数字を認識することはできますが、構造化されていないごちゃごちゃしたものに変換するだけなため、このデータを整理するためには手入力と同じくらいの人的労力が必要でした。

インテリジェントなドキュメント処理 (IDP) でソリューションを手に入れましょう。IDPなら、組織のドキュメントの内容を抽出、解釈し、拡充することができます。IDPはAIモデルとMLモデルを使用して継続的に学習し、時間の経過とともに精度と正確性を向上させることができます。



インテリジェントな 文書処理 (IDP) とは

IDPは、最先端の人工知能 (AI) を使用して非構造化データと半構造化データ内の情報を処理するインテリジェントオートメーションのサブセットです。テキストコンテンツを抽出、読み取り、認識、理解してから、構造化されたアクセス可能な形式に変換します。最近行われた調査によると、AIを活用したオートメーションは組織に大きな影響を与え、意思決定者の81%が、今後2~3年でコンテンツの多いプロセスがAIによって有意義に改善されるという予測に同意しています。¹

IDPを業務文書のスマートアシスタントとして考えてください。請求書、契約書、電子メール、画像などのさまざまな動的ファイル形式を、手動で追加の情報を入力する必要なく、高速かつ大規模にストレートスルー処理できます。面倒な手作業の必要性をなくすことで、業務効率と従業員の生産性を大幅に向上させることができます。

IDPソリューションは、人間の認知を模倣するように開発されています。時間が経つにつれて精度が向上する高度な継続的学習エンジンを利用して、[データキャプチャ](#)と抽出アルゴリズムに改善を自動適用し、正確なデータ出力を実現しています。

システムに正しい例（一連のドキュメントとその期待される出力）が与えられていると仮定した場合、教師あり学習を使用してIDPシステムをトレーニングするには、通常数か月かかります。しかしIDPシステムは、一度トレーニングを受けると、ドキュメント内に保持されている膨大な量の情報からデータ主導のインサイトと競争上の優位性を得るための絶好の機会を組織に提供してくれます。



¹ 2023年10月、ハイランドの委託によりForrester Consultingが実施した調査

インテリジェントな ドキュメント処理 (IDP) の仕組み

IDPは、オートメーションのテクノロジーと光学式文字認識 (OCR) のテクノロジーを、自然言語処理 (NLP)、機械学習 (ML)、ディープラーニングなどのAI機能と組み合わせ、データを取得してコンテキスト化し、精度を高めます。

上記の機能の多くは以前から存在していましたが（たとえば、「インテリジェントキャプチャ」ソリューション）、AIとローコード技術の進歩により、大手ソフトウェアプロバイダーは優れた次世代のIDPプラットフォームを市場に投入できるようになりました。

インテリジェントなドキュメント処理機能を提供するには、組織はドキュメントをキャプチャし、そのデータをデジタルで、またはヒューマン・イン・ザ・ループ (HITL: Human-in-the-Loop、人間参加型) で、取り込み、処理、分類、検証する必要があります。最後に、抽出されたデータはインテリジェントに処理され、システムやアプリケーションに組み込まれたり、下流のタスクやプロセスで消費される必要があります。



エンタープライズグレードのIDPソリューションの仕組みは次のとおりです。

1

ドキュメントの前処理

ドキュメントが処理プラットフォームに取り込まれ、分析の準備が整います。まず、OCRテクノロジーでスキャンされ、データのノイズ低減や自動傾き補正（デスキュー）などのキャプチャテクノロジーを使用して処理され、データの読みやすさと品質が向上します。

2

ドキュメント分割

複数の文書一式は、処理を進めるために個別の文書に分割されます。

3

文書分類

次に、文書はコンテンツ、形式、構造に基づいて分類されます。人間と同じようにデータを見るNLPアルゴリズムが展開され、テキストを状況に応じて解釈し、ビジネスに不可欠な情報を認識します。

4

データ抽出

次に、ソフトウェアは名前、住所、番号などの関連データを識別して抽出します。機械学習（ML）は、時間の経過とともにIDPソフトウェアのパフォーマンスを継続的に改善し、抽出プロセスの精度と効率を向上させます。

5

データ検証

抽出されたデータ内のエラーは、確認のためにフラグが付けられます。ヒューマン・イン・ザ・ループ（human-in-the-loop）検証では、モデルの予測アルゴリズムを微調整して学習プロセスを加速しながら、相違点を解決します。その後、最終出力内容はデータベースまたはその他のダウンストリームワークフローに統合され、さらに分析されます。

6

データ移行

抽出された正確なドキュメントデータは、他のコンピューターアプリケーション（ERP、CRM、Snowflake、意思決定モデルなど）に送信することも、意思決定プロセスで使用することもできます。

IDPソリューションの主なビジネス上のメリット

未来志向の組織は、正しいデータ活用が成功の基盤になることを理解しています。しかし、多くの企業は、日々の業務から発生する膨大な量のデータを効果的に管理する能力を備えていません。この膨大なデータの中から、データのノイズと真に価値のあるデータを読み解くのは至難の業でしょう。そこで、インテリジェントなドキュメント処理（IDP）が役立ちます。手動のドキュメント処理から自動化されたAI主導のアプローチに移行することで、IDPによってデータを活用し、企業全体を変革できるようになります。

IDPソリューションを採用した組織は、効率性、コスト削減、顧客満足度、従業員による優先順位付けなど、具体的な改善が見られたことを報告しています。

↓ コスト削減：

AIを活用したインテリジェントな自動化により、コストのかかる手作業の処理が大幅に削減されます。AIベースの抽出技術を導入して日常的なバックオフィスプロセスを最適化すると、企業はドキュメント処理に通常かかる時間を30~40%、運用コストを20%節約できます。

🚀 ビジネスプロセスの迅速化：

多くの企業は、日々の業務から発生する膨大な量のデータを効果的に管理する能力を備えていません。迅速かつ信頼性の高いドキュメント処理によりボトルネックが解消され、プロセスのサイクルタイムが短縮されます。

👍 データ品質の向上は、プロセスコストの削減につながります。

エラーやそれに伴う労働力の介入要件を減らすことで、個々のプロセスをサポートするために必要なリソースを減らすことができます。

☆ 無形のメリット：

これには、データ品質とプロセススループットの両方の予測可能性が含まれます。前者は、初回のデータの精度が高くなるだけでなく、修正段階中に二次的なエラーの影響を受けにくくなることを意味します。後者は、修正待ちのプロセスインスタンスがボトルネックとなることで（修正されたプロセスインスタンスが一斉に工程に押し込まれるため、「塊」状態のスループットが発生するため）引き起こされかねない遅延が回避されることを意味します。

📄 紙の使用量削減：

デジタルドキュメントへの移行は、環境の持続可能性に貢献し、組織がESG目標を達成するうえで役立ちます。

😊 カスタマーエクスペリエンスの向上：

IDPは、問い合わせに対する応答時間を大幅に短縮することで、優れたカスタマーエクスペリエンスを実現します。また組織は、抽出されたデータを正しく活用することで、個々の顧客のニーズに対応するパーソナライズされたアプローチを提供することもできます。

従業員の生産性の向上：

研究² Forrester Consultingの調査によると、意思決定者の69%が、生産性を高めるために従業員が必要なコンテンツや情報に簡単にアクセスできるようにすることが重要であると考えていることがわかりました。手作業によるデータのコピーや手直しが減ることで、従業員はより価値の高い戦略的な取り組みに集中できるようになり、生産性の向上につながります。

オートメーションのその他の取り組みに対する従業員の賛同の意見：

ローコードのIDPプラットフォームでのトレーニングとAIを活用したモデルトレーニングを通じて従業員のエンパワーメントに焦点を当ててすることで、従業員のスキルと信頼が高まります。このアプローチは、組織でのオートメーションの取り組みに対して従業員の賛同を得るうえで役立ちます。

プロセスの可視性、オートメーション、管理の強化：

ローコードのインターフェースにより、ソフトウェアコストだけに留まらず、プロジェクトのコストをより抑えることができます。ローコードテクノロジーを使用する従業員は、高価な外部の開発者リソースに頼るよりも早く、プロジェクトライフサイクルの早い段階でROIを実現できます。

データセキュリティ、コンプライアンス、リスク管理の向上：

IDPの自動文書分類機能は、適切な規制ポリシーに従って記録を管理、保持することで、コンプライアンスとデータガバナンスの取り組みを強化します。機密データは、人間との接触を減らすことで保護できます。グローバルなデータプライバシー基準やセキュリティ基準に準拠したデータ暗号化やアクセス制御などの堅牢なセキュリティ対策を組み込むことで、データをさらに保護できます。

IDPはモダナイゼーションと部門横断的なコラボレーションを促進します。

IDPは、近代化を大幅に推進するものです。重要なビジネス情報が大量かつ複雑になると、手作業によるドキュメント処理では到底対応しきれません。手作業によるドキュメント処理は、コストのかかるエラーや業務のワークフローを妨げるボトルネックにつながります。IDPを導入することで、こうした課題を回避し、ビジネス機能全体にわたるデジタル化のプロセスを迅速かつ正確に、コスト効率よく進めることができます。

イノベーションと成長を推進する競争上の差別化要因：

[Deloitte](#)の調査では、プロセスインテリジェンスによって価値の高いプロセスを特定しビジネス成果が向上すると回答した人が80%に上りました。さらに、IDPは生データを重要なビジネスインテリジェンスへと変換することで、競争上の差別化要因となり、イノベーションと成長を促進します。このようなデータ主導の貴重なインサイトを活用する組織は、新たなトレンドを活用して競争上の優位性を獲得するための迅速かつ戦略的な意思決定を行うことができます。

このような強みを念頭に置けば、多くの組織がプロセスの最適化でIDPを優先し始めた理由をすぐにお分かりいただけるかと思います。

² 2023年10月、ハイランドの委託によりForrester Consultingが実施した調査

IDPの主なビジネスユースケース

どの組織でも、多種多様なドキュメントタイプが存在します。数えきれないほどの人が、それらを正確かつ迅速に処理することに苦戦しています。そのため、IDPを活用できるユースケースが数多くあります。

財務と会計

- 請求書処理
- リポートまたは返品
- 銀行取引明細書
- 納税申告書
- 収集
- 経費領収書
- 領収書

金融サービス

- 顧客について把握する
- 住宅ローンのドキュメント
- 保険請求
- 所得の検証
- 銀行取引明細書
- 本人確認
- 口座開設と解約
- 詐欺検知

人事

- 従業員のオンボーディング
- 福利厚生管理
- 履歴書審査
- 人事記録
- 身分証明書
- 参考資料
- アプリケーション処理

ヘルスケア

- 患者登録
- 保険金請求関連ドキュメントの処理
- 患者の受け入れ
- 請求書
- 患者記録

保険

- 小切手処理
- 警察調書
- 詐欺検知
- 修理見積り
- 保険に関するドキュメント
- 査定人の報告書
- 保険金請求レポート
- 運転免許証
- 医療記録

政府・自治体

- 学校や大学への出願
- 移民サービス
- パスポートまたは車両免許証の処理
- 税関文書

サプライチェーン

- 税関申告書
- 注文のスケジューリングと追跡
- 船荷証券
- 保険に関する文書
- 配達領収書の証明

購買

- 注文処理
- 契約管理
- お客様のオンボーディング（
- 顧客契約
- ベンダーの受け入れ
- 入札

製造業

- 注文処理
- コンプライアンス文書
- データシート
- LEEDレター
- ラベルとパッケージ
- 品質管理記録
- 税関（輸出入）文書
- 規制文書
- リポートと返金

表1：組織で最も一般的なIDPのユースケース

事例

ある製造会社は、インテリジェントなドキュメント処理（IDP）を導入して、500社の異なるサプライヤーからの年間40万件を超える請求書の処理を自動化しました。このテクノロジーにより、スキャンされた請求書画像内の文字を識別する光学式文字認識（OCR）、単語を理解するための自然言語処理（NLP）、請求書の構造とレイアウトのパターンを認識する機械学習（ML）が統合されました。

この変革により、データ入力チーム29名の作業負荷がわずか4か月で70%以上も大幅に削減され、手作業による請求書入力という手間のかかる反復的な作業から解放されました。

同社は、新しいプロセスを監督するために6人の人材を育成し、IDPシステムのトレーニング、その作業品質の監視、システムでは処理できない複雑なドキュメントの管理を担当させました。2人のチームメンバーが、他の部署でも同様のデジタルトランスフォーメーションをデプロイする任務を負う一方で、残りの従業員は、インサイトに満ちた解説付きの業績分析など、より興味深く価値のあるタスクを引き受けるようさらなるスキルアップが行われました。この取り組みにより、業務効率が向上しただけでなく、人材をより有効に活用できるようになり、ビジネス全体の成長とイノベーションが促進されました。



その他のIDPユースケース

AI搭載のIDPプラットフォームは、ドキュメント内に隠れている情報から正確な回答を生成するための数多くのビジネスユースケースを提供しています。これらユースケースには以下が含まれます。

保険：

保険金請求を自動的に処理し、確立されたパラメータに基づいて保険金請求調停の適格性を判断することで、請求ライフサイクルを短縮します。また、過去の指標やアクティビティに基づいて不正な保険金請求を検出してフラグを立てるようにAIモデルをトレーニングすることもできます。

税務とコンプライアンス：

確定申告の処理とコンプライアンスのチェックを自動化することで、季節的に発生するボトルネックやスタッフの残業時間を軽減します。

金融サービス：

金融サービス分野では、IDPは顧客のオンボーディングと融資プロセスを合理化すると同時に、堅牢なデータガバナンス構造を導入してコンプライアンスを最大限に高めることができます。

ヘルスケア：

生成AIで医療業務と情報管理を変革し、臨床試験や患者の病歴のコンテンツの要約や高度な分析を支援し、精度の高いレポートを生成しましょう。

高等教育：

コース出願内にあるギャップやずれの特定から、編入単位のための成績証明書の比較まで、コンテンツ中心のプロセスにAIを活用することは、プロセスと学生体験の改善を目指す教育機関にとって非常に画期的なアプローチとなります。

デジタル資産管理：

充実したコンテンツと高度な検索機能により、クリエイティブコンテンツのライフサイクルを加速させ、新たなトレンドをいち早く取り込みます。

適切なIDPプラットフォームの選び方

成長を続ける市場では、さまざまなIDPプラットフォームから選択できます。³によると、世界のIDP市場は2022年の17億5千万ドルから2027年には61億7千万ドルへと、年平均成長率28.7%で成長すると予想されます。この複合市場は、特にドキュメントAIの応用と使用における技術的進歩により、急速な成長を遂げています。この成長は、デジタル化されたプロセスにおける透明性、可視性の向上、自動化を求める技術革新とマクロ経済の動向によってさらに促進されています。

そのため、自社組織に適したIDPソリューションを選択するのは難しい場合があります。IDPが特定の組織のニーズにどのように対応できるか、それをサポートする適切な機能を備えているかを検討することが重要です。

それでは、自社組織に特有のニーズに最も適したIDPプラットフォームはどのように決定したらよいのでしょうか？以下の選択基準を使用して、IDPプラットフォームの適合性を判断することができます。

精度の高さ

ほとんどのIDPソリューションの精度は、80%から99%までです。構造化形式と非構造化形式を含む複雑なドキュメントタイプを抽出、分類、検証する際に、ソリューションのAI搭載エンジンがどれほど正確であるかをベンダーに尋ねるようにしましょう。

複数のファイル、ドキュメント、言語タイプに対応していますか？

複数のドキュメントを自動的に識別し、ビジネスプロセスや言語に関係なく、すべてのページから正しいデータが抽出されるようにする機能が重要になります。

取り込んだデータをクリーニングし強化できるか？

直線化、網掛けや網点の除去、文字の強調などの画像のクリーンアップ機能が重要になります。コンテンツエンリッチメント機能により、コンテンツからより意味のあるデータを抽出し、情報への迅速なアクセスとビジネス情報の深い理解を可能にします。

ユーザーフレンドリーかどうか

ビジネスユーザーが高度なコーディングやAIの専門知識を必要とせずに、新しいAI/MLモデルや自動化をトレーニングしてデプロイできるようにする直感的なノーコードまたはローコードのインターフェースは、デジタル化を民主化するうえでの鍵となります。採用するソリューションは、直感的なウェブベースのユーザーインターフェースで使いやすく、既存のビジネスアプリケーションとシームレスに統合できるものでなければなりません。

技術者以外のユーザーでも使用できますか？

組織のデジタルトランスフォーメーションプログラムに対して幅広いサポートを得るためには、ローコードでIDPプラットフォームをプログラミングして拡張する能力が不可欠です。ローコードツールを使用すると、従来のコーディングやスクリプトのように費用や時間をかけたり、複雑になったりすることなく、IDPプラットフォームに即座に変更を加えることができます。

³ IDC Worldwide Intelligent Document Processing Software Forecast, 2023-2027 (2023~2027年の世界のインテリジェントなドキュメント処理ソフトウェアに関する予測)

AI搭載でトレーニング可能ですか？

AIベースの能力と限界点、人による入力内容をどれだけ効果的に取り入れることができるかを把握しておきましょう。画像、表、ドキュメント、バーコードなど、重要な情報がどこにあるかを判断する能力を持つ機械学習モデルは、IDPプラットフォームの精度を向上させるために不可欠です。

IDPソリューションは、時間の経過とともに学習、改善、訓練することができる内蔵インテリジェンスモデルを基に動作します。内蔵されたインテリジェンスにより、時間をかけて継続的に改善し、手動のタッチポイントをさらに減少させ、処理を高速化することができます。これにより、手作業による処理やデータ入力の負担が軽減され、下流の分類やデータ処理が高速化され、組織のITシステム全体の情報精度を向上させることができます。

複数のファイル、ドキュメント、言語タイプに対応していますか？

AI強化機能と自動化された安全対策により、運用上のボトルネックを最小限に抑え、新たな効率性を実現できます。ドキュメントは構造化されていないことが多く、つまりコンテンツの場所やファイル形式が他の類似フォーム間で異なる場合があります。

ドキュメント理解AI技術をデプロイする業者が、生成AIと大規模言語モデル（LLM）を統合するケースが増えています。これらの統合により、セマンティック解析、ドキュメントクエリ、高度なエンティティ抽出などのソフトウェア機能を強化することができます。⁴

生成AIは、RAG（Retrieval-Augmented Generation）を用いることで、ドキュメントをより深く理解し、エンタープライズのコンテンツに基づいた正確な回答を取得するうえでも非常に役立ちます。生成AIは、不足しているメタデータを生成することで情報のギャップを埋めます。また、自然言語でのユーザーからのプロンプトや質問により、新しいメタデータフィールドを作成することもできます。これにより、ドキュメントをよりよく理解できるようになり、企業のコンテンツに基づいて正確な回答を得ることができます。

データガバナンスとセキュリティポリシーは？

情報ガバナンスとデータセキュリティは、組織にとって最優先事項です。コンプライアンスと監査目的のために、ソリューションが堅牢なデータロギングと構造化されたドキュメント保有規程を備えていることを確認しましょう。組織内のさまざまなビジネスグループに対して、役割ベースの権限コントロールが存在している必要があります。また、IDPデータロギングは、セキュリティリスクの評価、コンプライアンス、監査のために不可欠です。そして今のAIの時代には、記録をログして保持し、構造化されたデータ保有ポリシーを実施し、情報ガバナンスをサポートし、法的リスクを最小限に抑える能力も不可欠になります。

テクニカルサポートを利用できるか

業者は、必要に応じて、包括的な技術トレーニング、オンライン学習プラットフォーム、専門家によるサポートも提供する必要があります。

高度な分析機能が備わっていますか？

主要なプロセス指標やパフォーマンス指標に加え、IDPプラットフォーム自体の精度とパフォーマンスを示す指標へのアクセスは不可欠です。包括的な分析内容を確認できることで、組織は情報に基づいた意思決定を行い、プロセスを最適化し、デジタルトランスフォーメーションの取り組みの有効性を確保できるようになるため、分析機能は非常に重要な要素となります。

⁴ IDC MarketScape: Worldwide Intelligent Document Processing Software 2023-2024 Vendor Assessment (2023~2024年の世界のインテリジェントなドキュメント処理ソフトウェア 業者評価)

適切なIDPプラットフォームの選び方

🗂️ そのアプリケーション・インテグレーション機能は？

卓越したIDPソリューションは、すぐに使える幅広い機能を提供するため、企業は複雑化するビジネス要件に合わせてIDPプラットフォームを拡張し、他の企業アプリケーションとシームレスに連携して最適なユーザーエクスペリエンスを実現することができます。

⚙️ オートメーション機能はありますか？

IDPを組織のオペレーションに統合することは、自動化への第一歩を踏み出すだけにとどまらず、よりデータインテリジェントな未来に飛躍することになります。統合されたプロセス自動化、高度なAI主導のデータ抽出、拡張可能なローコードアーキテクチャなどの機能により、プラットフォームの導入と拡張が加速されます。

IDPプラットフォームは、自動化およびデジタル化プログラムをサポートするためには、補完的なプラットフォームと製品（ケース管理、ワークフロー、インテリジェントオートメーション、ロボティック・プロセス・オートメーション（RPA）など）のポートフォリオを提供する必要があります。



IDPプラットフォームによるビジネス効果を最大化するための重要な成功要因

IDPプラットフォームの導入には、成功の可能性を狭めてしまいかねない課題にぶつかる場合があります。それでも、IDPを正しく導入すれば、比類のないスピード、効率、正確さでデータ管理に革命をもたらし、そのコストをはるかに上回る利益がもたらされます。エンタープライズIDPソリューションから最良の結果を得るためには、以下の5つの手順に従いましょう。

1

インテリジェントなドキュメント処理の利点を明確に示す強力なビジネスケースを構築します。

- 価値証明（POV）を実行して、特定の組織内でのIDPテクノロジーソリューションの適合性を評価します。
- 主要な利害関係者にそのソリューションを示し、指示とフィードバックを求めます。
- 価値の高いIDP商機のバックログを収集して優先順位を付けるためのワークショップを実施します。

2

経営陣の承認とスポンサーシップを求めます。

- IDPプログラムを推進するエグゼクティブスポンサーを確保します。
- 経営陣の承認とプログラム予算を得るために、予想される総利益と実装のロードマップを含むIDPのビジネスケースを経営陣に提示します。
- 実装期間とランニングコストについて、現実的な期待値を設定します。
- 商機とメリットを長期にわたって追跡するための明確なガバナンス構造を概説します。

業者に連絡して、IDPプラットフォームと実装パートナーを選択します。

- 業者選択マトリックスを作成し、各IDP業者とそのプラットフォームを評価します。
- CISO、リスク、財務、調達各チームと連携して、選択したIDP業者と自社双方にメリットのある取引を交渉します。
- 安全で組織全体で使えるIDPプラットフォームを選択します。
- 業者に実装チームがない場合は、市場に参入して実装パートナーを特定します。

IDPソリューションをロールアウト（展開）します。

- 小さく始めて大きく考える：IDPソリューションの迅速なスケールアップで、ビジネスに大きな価値をもたらしましょう。
- IDPの採用、ベストプラクティス、広範な使用を促進するために、専門知識センター（COE：Center of Expertise）を構築します。
- IDPプログラムへの賛同を獲得し維持するために、包括的なトレーニングおよび変更管理プログラムを開発します。
- ユースケースに特化した大量のドキュメントとデータを使用して、IDP機械学習モデルをトレーニングします。
- データ品質のチャンピオン（推進者）がサポートし実施するデータガバナンス統制を採用することで、データ品質と整合性に重点を置きます。
- 社のドキュメントで学習させたRAG（Retrieval-Augmented Generation）でAI学習モデルを強化することで、ドキュメントの内容をより深く理解できるようになり、より適切で有益なアウトプットが得られます。
- IDPプラットフォームの精度とパフォーマンスを示すIDP指標とパフォーマンス指標を継続的に監視します。

IDPソリューションを企業全体に拡張

- IDPソリューションを迅速に拡張します。たとえば、まずは一つの国の請求書や一つの地域内のトップ業者からのドキュメントから始め、その後、複数の機能や地域、海外地域にもまたがって迅速なスケールアップを行います。
- ロボティック・プロセス・オートメーション（RPA）などの補完的技術を活用します。これにより、アプリケーション、システム、スタッフ間のデータの流れが加速され、スタッフが重要なビジネスやプロセスの意思決定を行う際に、常に最も正確で最新の情報で作業できるようになります。
- ビジネス上の利害関係を維持し、IDP提供プログラムへのさらなる資金やアイデアを呼び込むために、IDPプログラムの利点と影響を継続的に称賛します。
- IDPの提供を管理し、時間の経過とともに価値が実現されるようにします。

結論

日々の業務から生成されるデータ量が増大するにつれ、インテリジェントなドキュメント処理（IDP）は、補助的な技術ツールから、競争上重要な差別化要因へと変化しています。業務や戦略的意思決定においてAIを活用したドキュメント処理を行うことで、効率性、正確性、革新性が新たなレベルへと高められ、競合他社で溢れる市場において自社ビジネスを際立たせ差別化することができます。

手作業によるドキュメント処理に頼っている組織は、高いコスト、エラー、業務の遅れに直面するうえ、データ品質の低下や、ビジネス上最適とは言えない意思決定につながってしまいます。対照的に、AI搭載のIDPプラットフォームなら、膨大なドキュメントリポジトリからデータが正確かつ大規模に抽出、分類される最先端のソリューションを提供します。この精度は、ほとんどの予算に見合ったコストで実現され、理想的な投資収益率をもたらします。

IDPを導入することで、企業はドキュメントライブラリから貴重なデータを引き出し、従業員をより戦略的なタスクに集中させることができます。IDPを通じて活用されるデータは、より良い意思決定を可能にし、ビジネスをインテリジェントなデジタル組織へと変革します。IDP市場は、生成AIや大規模言語モデルなどのAIの進歩により、ドキュメント処理の効率と機能がさらに向上すると期待されており、さらなる成長が見込まれています。

IDPプラットフォームの機能は、時間の経過とともに、より強力、正確、高速になるため、その価値と影響力がさらに高まることとなります。自社組織をインテリジェントなデジタル・エンタープライズへと変革することが目標の場合は、最も重要なデータに命を吹き込み、業務効率を高め、持続可能な成長を実現する方法としてぜひIDPをご検討ください。

IDPによるトランスフォーメーション（変革） [をすでに開始しましたか？](#)



著者について

Pascal Bornet氏



Pascal Bornet氏は、人工知能（AI）とオートメーションにおいて受賞歴のあるエキスパート/作家/基調講演者です。Bornet氏は複数の賞を受賞しており、定期的にAIおよびオートメーションの世界のトップ専門家10人の1人としてランクインしています。また、ソーシャルメディアで100万人以上のフォロワーを持つインフルエンサーでもあります。

Bornet氏は、McKinseyとEYのシニア・エグゼクティブとして20年以上にわたって専門知識を深め、「インテリジェントオートメーション」プラクティスを作成・主導し、世界中の何百もの組織を対象にAIとオートメーションの取り組みを実施しました。

過去20年間、Bornet氏の研究はAIと人間の交わりに焦点を当てており、そこに最大の価値があると氏は考えています。彼は人間中心のAIを強く支持しており、適切なアプローチによって、AIによって私たちの世界をより人間らしいものにすることができると信じています。

著書にベストセラーとなった『INTELLIGENT AUTOMATION』と『IRREPLACEABLE』があり、彼の見識はForbes、Bloomberg、McKinsey Quarterly、The Timesなどの一流誌で紹介されています。また、複数の大学で講師を務め、Forbes Technology Councilのメンバー、そして複数のスタートアップや慈善団体のシニアアドバイザーとしても活躍しています。

Kieran Gilmurray氏



Kieran Gilmurray氏は、AI、自動化、GenAI、デジタルトランスフォーメーションの分野で30年の経験を持つ、国際的に高く評価されている専門家です。作家、業界アナリスト、そして実世界のストラテジストとして、革新的なソリューションと実行可能な戦略を通じて、数々のビジネスに2億ドル以上の価値をもたらしてきました。

Kieran氏は、自身の分野で世界トップクラスの専門家の1人として認められており、世界中で定期的に基調講演を行っています。また、「Best LinkedIn Influencers Artificial Intelligence and Marketing (2024年ベストLinkedInインフルエンサー、人工知能およびマーケティング部門)」や、「Top 14 People to Follow in Data in 2023 (2023年データ分野のフォローすべきトップ14人)」、「World's Top 200 Business and Technology Innovators (世界のトップビジネス&テクノロジーイノベーター200人)」などの権威あるリストに名を連ねています。Kieran氏の専門分野は、中規模から世界規模の組織向けのデータ分析から、オートメーション、AI、プロセス改善、新興テクノロジーソリューションの開発まで、多岐にわたります。

Kieran氏の学歴は多岐にわたり、クィーンズ大学ベルファストにて優秀な成績でMBAを取得し、コンピューターサイエンスの修士号、ビジネスファイナンス、企業経営、エグゼクティブコーチング、デジタルマーケティングなどのさまざまなディプロマを取得しています。また、作家としても、デジタルトランスフォーメーションと生成AIに関する実践的な本を2冊執筆しており、ビジネスプロフェッショナル向けの複雑な技術概念を解説しています。

Kieran Gilmurray氏は、FTSE 100企業でリーダー的役割を果たし、AIおよびインテリジェントオートメーションを専門にしたグローバルセンターを構築した実績もある、急速に進化するデジタルトランスフォーメーションと人工知能の世界で人気のコンサルタント兼アドバイザーです。

Hyland™